

ROVERS HARBOR

Keywords

政治対立 異文化理解 海
ターミナル 倭寇 対馬

1. Prologue

2012年、領土問題を発端とし、日中韓政府の間には大きな亀裂が走った。広がり続ける亀裂は大衆にも波及し、デモや特定国からの観光客・企業の襲撃が起き、政治は特定国籍人の入国制限を検討し、2007年から毎年行われてきた日中韓観光閣僚会議は中止された。たった島ひとつ、岩礁ひとつを巡って国の関係・国を超えた人々の関係は簡単に変わってしまう。このまま対立を深めてしまえば、政治やそれに影響された大衆によって国家間が隔絶してしまうかもしれない。

2. Background

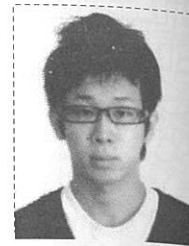
日中韓は領域を巡って度々争ってきた。3カ国間はそのすべてが海であり、したがって領土問題の多くは海上の島や岩礁などの場所、もしくは海を主戦場にした戦いが関わっている。海を越える手段として飛行機が主となっている昨今において、意外にも日中韓の国際客船の利用者は増えている。日常の中で領土問題の現場である3カ国の間に広がる「海」を実感する機会は少ない我々にとって3カ国の海峡を行き来する機会はこのような問題を意識する上で意義深い。

領土問題に対して向き合い、互いの共存を模索する場所はやはり海峡にあるのではないか。

3. Rovers

歴史上国家対立によって公の意味で国交が断絶したことは度々あった。だがその中にもあっても海峡を流浪する人々が国を超えたつながりを生んできた。

例えば倭寇を挙げる。倭寇は13世紀から16世紀にかけてアジアの海をまたにかけた無法者集団である。一般には、日本人略奪集団として認知されがちであるが、実はそうではなく、日本・中国・朝鮮・東南アジア諸国の人々が混合する多国籍集団であった。さらに当時、元寇や豊臣秀吉の朝鮮出兵があったにもかかわらず、彼らはアジア各地の拠点で私設商船団として、交易を行っていた。つまり政治対立の中にもあっても海を介して3カ国を結んでいたのである。



K09028 川原 聡史

4. Concept

領土問題による国家対立に直面する今、歴史上の国家対立国交断絶の中でも海を渡り、国をつないだ海峡民としての倭寇のコンテクストを媒介として、3カ国の海峡を行きかう過程の人々が集まる場所を考える。日中韓の人々がそれぞれに自身の国のアイデンティティを確認し、他の2カ国を理解するきっかけを与え、また3つの国の調和を願う祈念碑となる建築を設計する。

5. Site

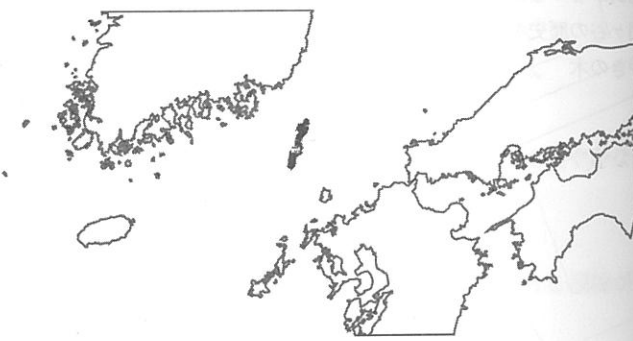


図1. 対馬の位置

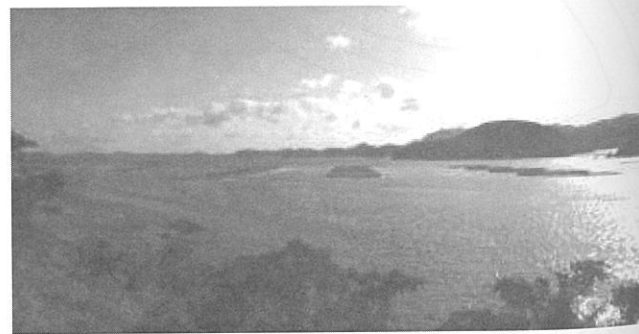


写真1. 敷地周辺の様子

敷地を対馬、浅茅湾、尾崎地区沖にある岩礁、馬耕島の上とする。対馬は当時の日本・中国・韓国をまたにかけた倭寇たちの一大拠点であり、今も日中韓を中心としたアジアの国際フェリー航路の多くが近海を通過するなど、日中韓をつなぐ玄関口となる位置にある。また対馬自体も度々領土問題の現場となってきた。

浅茅湾尾崎周辺は氷河地形であることから海が深く、波も静かで船の停泊・進行に障害が少ないので、倭寇のコンテクストをもって日中韓の3つの国の交流を図る海上施設の最適地と考える。

6. Program

プログラムとして、日中韓から対馬周辺の海峡を航行する船舶が発着する、3カ国それぞれの文化や歴史等々を発信するエキシビション、及びイベント空間を備えた建築を設計する。

海峡を行きかう人の集散地点での3カ国間の相互理解と共存を目指す、日中韓の調和のための祈念碑の建築でもある。

7. Master Plan

日中韓の倭寇交易の最大拠点であった、博多、温州、釜山へと延びる軸線とその交点を使って設計をする。これは今再び3カ国の間に広がる海の流浪者のコンテクストをもって海上で3カ国を結びつけることを意味する。各軸線は3カ国の文化発信施設及び各国からの船舶の発着所のゾーニングと対応し、それによって作られる三角形の内部はイベント空間に対応する。船で来航した人々はそれぞれの国の軸線で作られた三角形の外から中心へと導かれ、三角形の各辺である各国のフィルターを介してこの場所を旅立っていく。

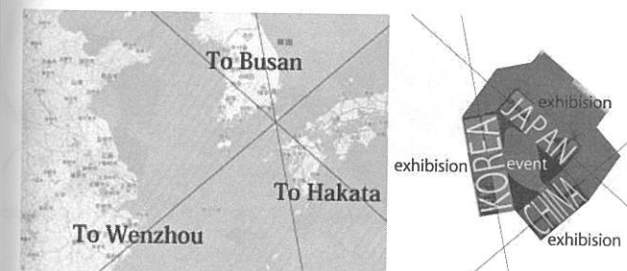


図2. 軸線とゾーニング

8. Design Key

これまで建築に国性を求めるとき、素材や装飾等のディテールのデザインに頼ることが多かった。しかし、これらは建築として同時共存すれば全体としては崩壊する。3カ国の調和を求める建築としては個性ではなく国性を、端的でなくとも確かなものに預けたデザインが必要である。

本設計では建築要素として日中韓の間に共通するモジュール単位「間」を用いる。単位としての間の扱いや長さは各国の文化や尺貫法による差異が発生している。それぞれの尺貫法にのっとってプレートのピッチ、厚さ、ヴォリューム配置などを徹底し、特に構造体でもあるプレートの構成に国性を預ける。プレートに埋め込まれた

ヴォリュームでは前述の軸線との関係性、そしてこのモジュールによって何気なく感じることのできる、確かな国性を帯びた展示空間を実現する。

表1. 使用するモジュール

国名	長さ(mm)
日本	1 間=1818,1尺=303
中国	2000,333
韓国	2196,366

9. Sequence

潮の満ち引きを利用し、シークエンスを演出する。干潮時から通常時にかけては全体が海上にあり、3カ国の展示空間は中央のドームを介して接続される。潮が満ちてくると徐々に中央のドームに水が流れ込む。大潮の日の満潮時にはドームは水に満たされ、展示空間は3つに分断される。

このシークエンスによって3カ国間の現在の危うい関係性を象徴させ、逆に3カ国のつながった状態を際立たせる。

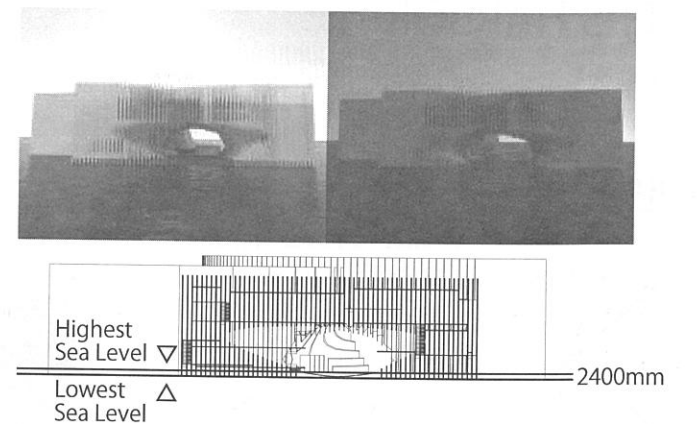
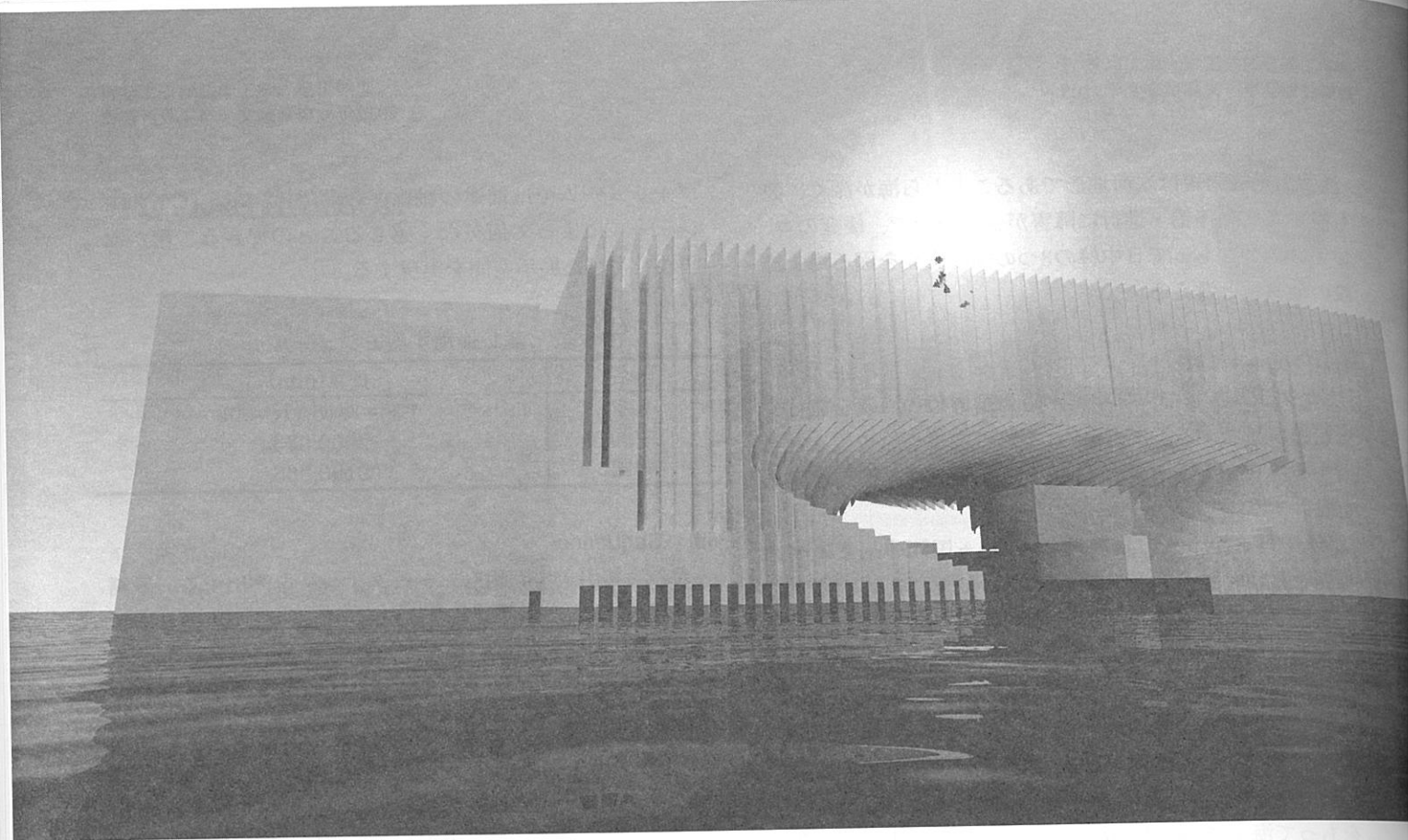


図3. 潮の干満によるシークエンス

参考文献

- 「日本の領土問題」保坂正康・東郷和彦 角川書店 2012
- 「対馬と海峡の中世史」佐伯浩二 山川出版社 2008
- 「倭寇の面々が暮らした島 対馬」大江正康 対馬国界クラブ 2011
- 「韓国の建築」金奉烈 学芸出版社 1991
- 「カラー版東洋美術史」前田耕作 美術出版社 2000
- 「EXP070 パビリオン」橋爪紳也 平凡社 2010
- 「国際化と港」日比野光伸 成山堂書店 1999

佐藤生 佐藤裕久



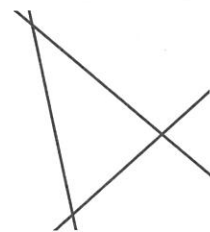
ROVERS HARBOR

Architecture for three nations in far east Asia.
Diploma Project 2013

DIAGRAM



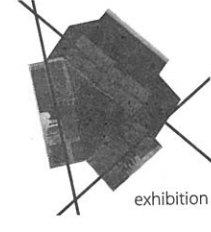
the three axes



the triangle
composed
by the axes



the plates
based
the old systems
of measures

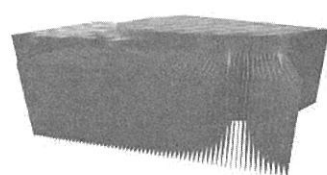


the volumes
of exhibition
intruded



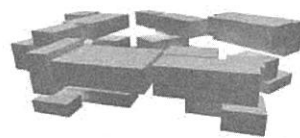
the void
not based
the old systems

STRUCTURE CHART



structure
plate

+



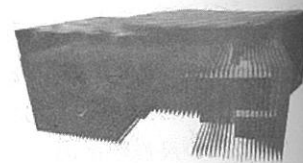
exhibition
volume

-



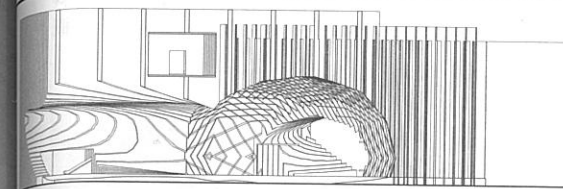
event space
void

=



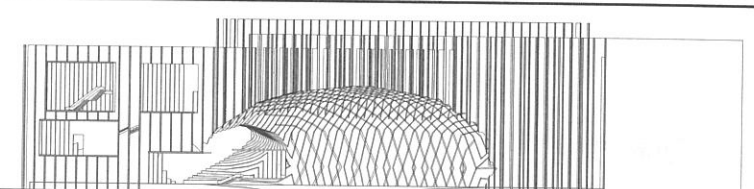
architecture

SECTIONS



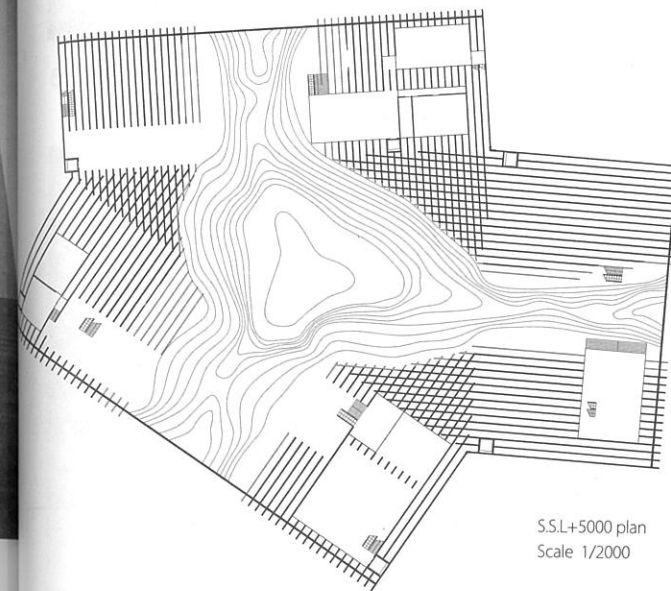
Section East-West

Standard S.L.
(S.S.L.)
Scale 1/2000

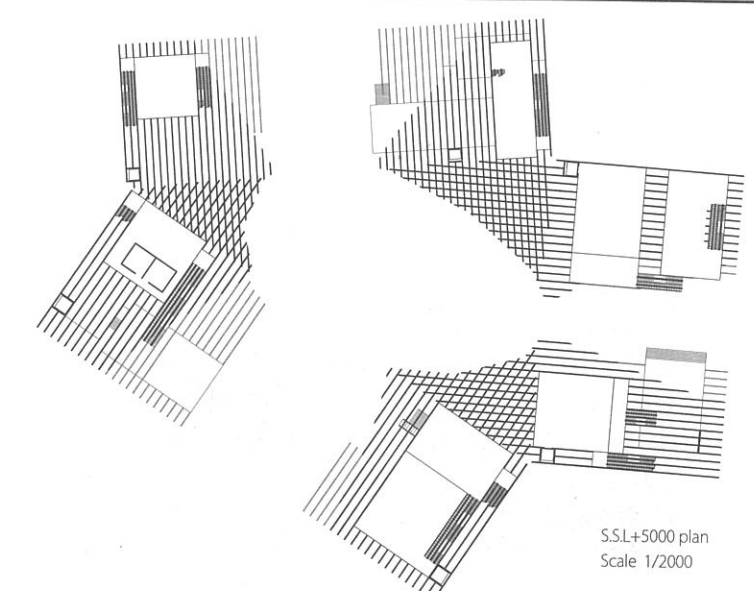


Section South-North

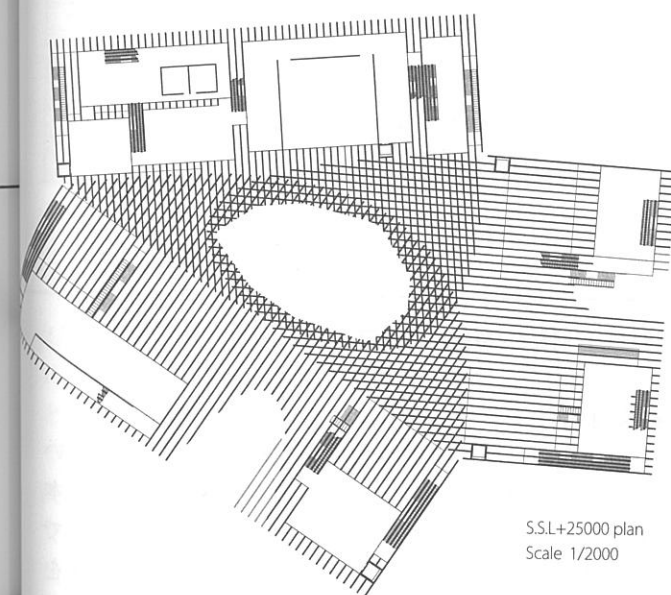
PLANS



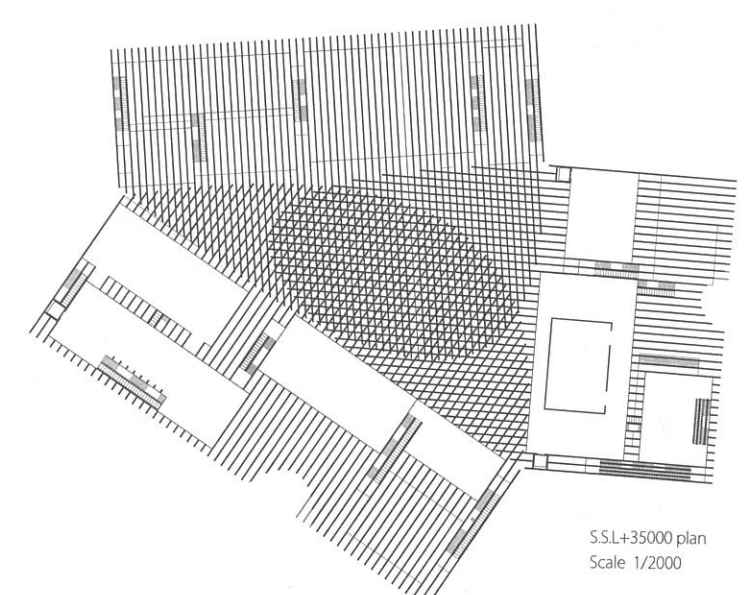
S.S.L.+5000 plan
Scale 1/2000



S.S.L.+5000 plan
Scale 1/2000

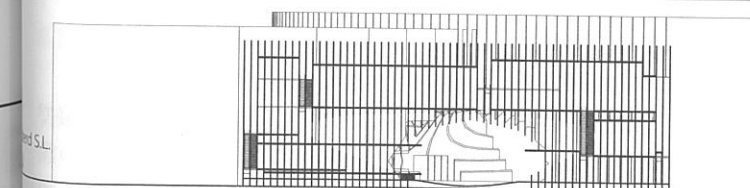


S.S.L.+25000 plan
Scale 1/2000



S.S.L.+35000 plan
Scale 1/2000

ELEVATIONS

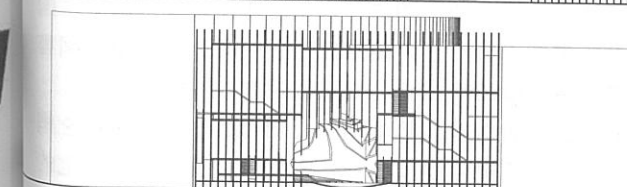


Japan

Scale 1/2000

Module

1,818

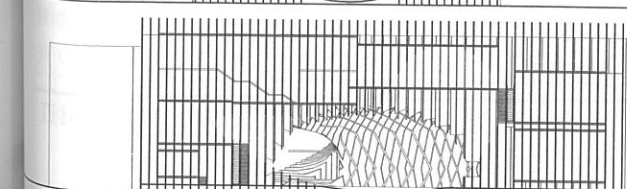


China

Scale 1/2000

Module

2,000



Korea

Scale 1/2000

Module

2,196